

JA 全農 ET センターニュース平成 17 年 12 月号

今月は韓国出張（10/11-15）の機会を得たので、その韓国のウシ ET の現状を報告させていただきます。

韓国のホルスタインレベルについて

検定参加農家の 1 頭あたり平均乳量 7933K g とレベルは低くない。韓国ナショナルショウでの体型もレベルが高いものがあり、日本にきても上位の牛が散見された。乳牛の ET は牛乳の生産調整から頭数拡大には向かえず、体型・能力上位のもので、ごく僅かに取り組まれているのが現状である。北米からの輸入精液の利用が 50%前後と高い。ただし、ダーラムやゴールドウインなどの貴重な精液は入手されていない。採卵は 2004 年で 104 頭実施され、589 個の移植がなされている。ただし、生産者および各組合は改良にとても熱心であり、今度の日本の全国共進会（栃木 11 月）には 150 名が韓国から参加するとのこと。また乳牛の輸入受精卵にも関心が高まってきている。

将来、日本から韓国へ乳牛受精卵が輸出できる可能性は十分にあると考えられ、韓国の畜産団体との交友を民間レベルで深める必要性を痛感した。

肉牛としての韓牛（日本の赤毛和種の元祖にあたる）の状況

国内経済状況が良好で、肉消費が伸びている。韓牛の濡れ子価格は約 35 万円で取引されており、日本の黒毛和種と同様に高値で推移している。受精卵の移植も伸びており、2004 年度は体内卵が約 1000 個、体外卵が約 20000 個移植されている。体外受精卵の受胎率は 40%前後であり、日本と比較しても遜色はない。しかし現場では受胎率良好な体内受精卵の希望も増えつつある。ソウル乳業でも韓牛のドナーを増頭中であった。

ET 技術の現状

粗飼料が約 80%北米から輸入されており、日本よりも牛の発育性や繁殖状況は逆に安定していると思われた。体外受精技術レベルは日本と比較しても遜色はなく（テグ大学やソウル乳業）、発育率は 35%、凍結可能胚率は 24%であった。しかし、体内受精卵部門はソウル乳業の生命工学研究所しかなく、まだまだ改善の余地があると見受けられた。今年度中に牛受精卵の性別判別（日本のキットを使用：LAMP 法）を開始（テグ大学およびソウル乳業）する。韓牛では増頭対策があり、性別判別技術を利用して、雌を増やしたいとのこと。